主文・補文における T-to-C movement の相違と縮約形の生成過程について

―仮定法倒置条件節における縮約形のふるまい―

文学部文学科英米文学専攻

木村（きむら）　舜（しゅん）

第１章　はじめに

本稿では Were it not for ～や Had it not been for ～といったような補文標識 if を省略した際の仮定法倒置条件節（inverted subjunctive conditional clause）に注目し、条件節を生成する上での縮約形や移動における主文と補文との間の相違を統語的に探っていく。野村（2019）は仮定法倒置条件節が文語的構文であるものの、決して使用頻度が低いわけではなく、ビジネスレターや英字新聞でもよく見られるものであると指摘している。特に英字新聞では見出しで使う際に、if はたったの１語とは言え短縮することができるため重宝されているということである。事実、高校英語の教科書や参考書を拝見しても、この仮定法倒置条件節に関する構文が重要視されていることが見て取れる。このような補文標識 if が省略された条件節を生成する際、倒置によって主語の前に出た were や had は最終的に that, if, for などの補文標識が置かれる C（Complementizer）に位置していることが予測されるが、*Weren't it for ～ , *Hadn't it been for ～のように否定縮約形が C に位置することは許されない。しかし主文では Aren't you happy?, Can't you come here soon? のように、否定疑問文の形で否定縮約形が C に位置することが可能になっている。*If can you play the piano ～のように補文標識と前置された助動詞の両方を含む構造は許されないことからも、補文標識 if と前置された助動詞は互いに排他的（相補分布）の関係にあることが予測される。その相補分布の関係を踏まえるのであれば、補文標識 if を省略した際の倒置条件節において、否定縮約形の weren't、hadn't が主文の否定疑問文と同様に C に位置することが許容されてもよいはずである。しかし *Weren't it for ～ , *Hadn't it been for ～のような条件節は非文法的となってしまっていて、否定縮約形のふるまいと移動には、主文と補文の両者の間で違いがあるように思われる。本稿ではそのような主文と補文の相違に主眼を置き、否定縮約形のふるまいに違いを生ませている要因が null complementizer Q の有無によるものではないかと主張していく。

第２章ではまず Radford（2004）、Carnie（2013）の分析をもとに動詞の主要部移動に目を向けていく。また Aart（2018）における Not-movement に関する分析、及び Pollock（1989）の NegP（Negation Phrase）分析にも触れながら、否定辞 not の統語的な位置づけに注目していきたい。続く第３章では、本稿の主題となっている補文標識 if を省略した際の条件節の構造を確認しながら、主文と補文における否定縮約形の生成とふるまいの相違点を探っていく。第４章では第３章で論じた問題点をもとに、Aarts（2018）の Not-movement の見解に見直しが必要であることを確認し、最終的な提案をまとめていく。

第２章　先行研究

この章では、まず本動詞に関わる主要部移動について概観し、否定辞 not のふるまい及び Not-movement、Pollock（1989）が提示する Negation Phrase（NegP）分析についての先行研究をまとめていく。

2.1　Verb movement（V-to-T）

V-to-T movement は主要部移動の１つであり、動詞主要部が VP の主要部である V から

TP の主要部である T へと移動することである。しかし顕在的に動詞移動が起こるかどうかは言語によって異なり、現代英語では本動詞は顕在的に移動しないとされる。そこで Radford (2004)、Carnie (2013) の分析に基づきながら、フランス語の本動詞及び、当該の移動が散見されるエリザベス 1 世による統治の時代の用例に着目し、V-to-T movement について概観していく。

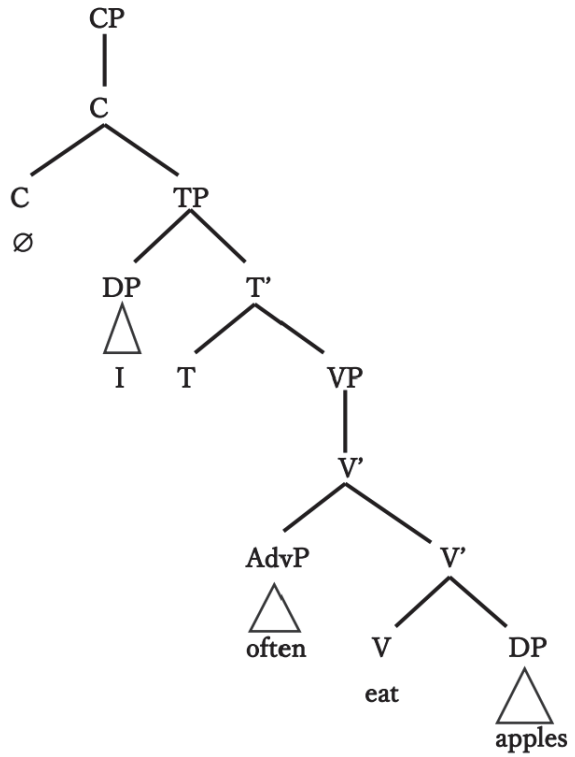
(1) Je mange souvent des pommes.
I eat often of.the apples
"I often eat apples."

Carnie (2013:292)

上記のフランス語の文では副詞 souvent が動詞 mange と補部 des pommes の間に介入しているが、英語では副詞が動詞と補部の間に介入することがない。以下 (2) の例を樹形図で示すと (3) のような構造となる。

(2) I often eat apples.

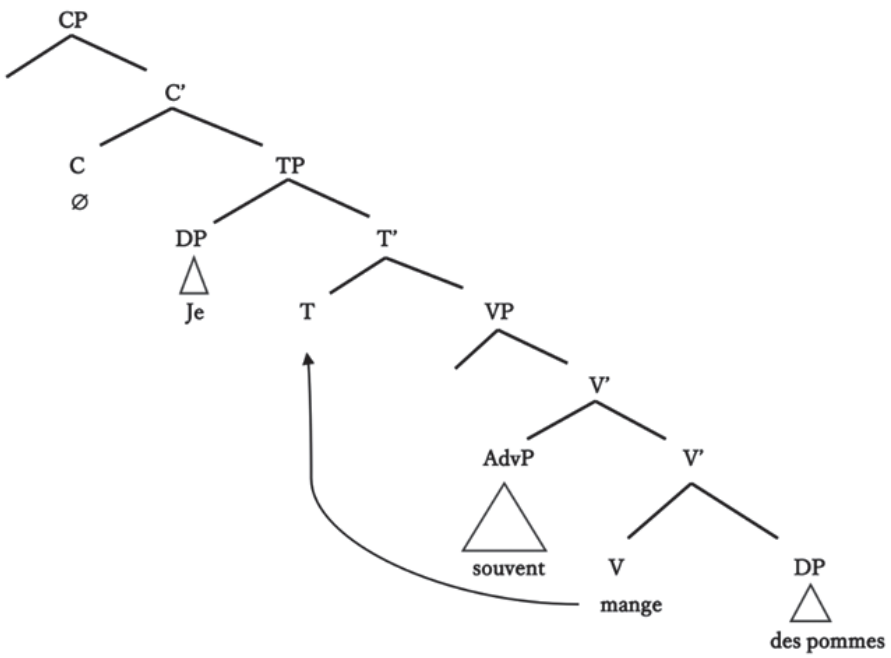
3)



Carnie (2013:293)

この構造から考えられることはフランス語の場合、動詞が最終的に VP 内の V ではなく、その上位の T の位置に置かれていることである。これら英語とフランス語の構造上の違いを示すため、(1) Je mange souvent des pommes. の派生を以下で示す。

4)



Carnie（2013:295）

動詞 mange が VP の主要部である V に基底生成し、その後 TP の主要部 T へと上がっていて、フランス語では本動詞において V から T への主要部移動見られることが分かる。また現代英語では本動詞の V から T への移動は起こらないものの、エリザベス朝期の英語ではこの V-to-T movement が生産的だったと言われている。

(5) (a) I care not for her（Thurio, The Two Gentlemen of Verona, V.iv）
(b) He heard not that（Julia, The Two Gentlemen of Verona, IV.ii）
(c) My master seeks not me（Speed, The Two Gentlemen of Verona,I.i）

Radford（2004:130）

上記はシェイクスピアの用例であるが、本動詞が not の前に置かれている。しかしエリザベス朝期の英語では not は以下のように本動詞に先行していて、定型助動詞を含む際には not が助動詞と本動詞の間に位置するのが通例である。

(6) (a) Thou hast not left the value of a cord（Gratiano, The Merchant of Venice, 4.i）
(b) She shall not see me（Falstaff, The Merry Wives of Windsor, 3.iii）
(c) I will not think it（Don Pedro, Much Ado About Nothing, 3.ii）

Radford（2004:130）

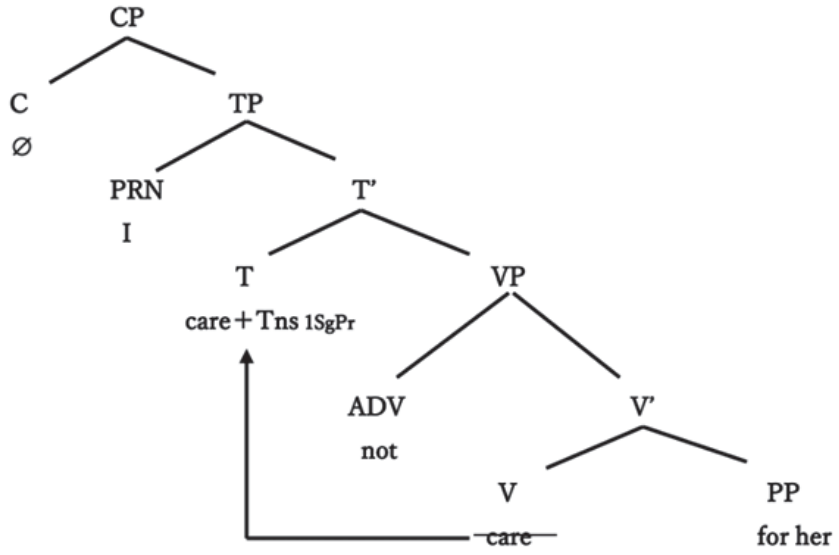
それゆえ(5)において動詞が最終的にnotの前に置かれる場合の扱いをどうするべきかという問題点が生じてくるが、ここでの解決策はエリザベス朝期の英語において、時制を持つTに助動詞が含まれていなかった場合、Tの位置を埋めるために、動詞がVPの主要部であるVからTPの主要部であるTへと移動すると仮定することである。例えば(5a) I care not for herの例では以下のような本動詞のV-to-T movementが起きている。

(7) [TP I [T care] not [VP [V care] for her]]

Radford (2004:131)

このように最終的に本動詞careはnotの前に移動し、移動前のオリジナルは空として排出されるが、なぜ本動詞が元位置Vにとどまることができず、主要部Tに移動しなければならないのかという疑問が生じる。これに関してチョムスキーは、エリザベス朝期の英語では時制を持つTはstrongなものであるという比喩を用いていて、Tは何らかの形で満たされていなければならないと主張している。またTがstrongであるとたらしめる根拠としてTが強いV素性を持つTns接辞を含んでいるために、当該の接辞を付与するための動詞を必要とするため、Tns接辞が本動詞のVからTへの移動を誘発していると説明している。

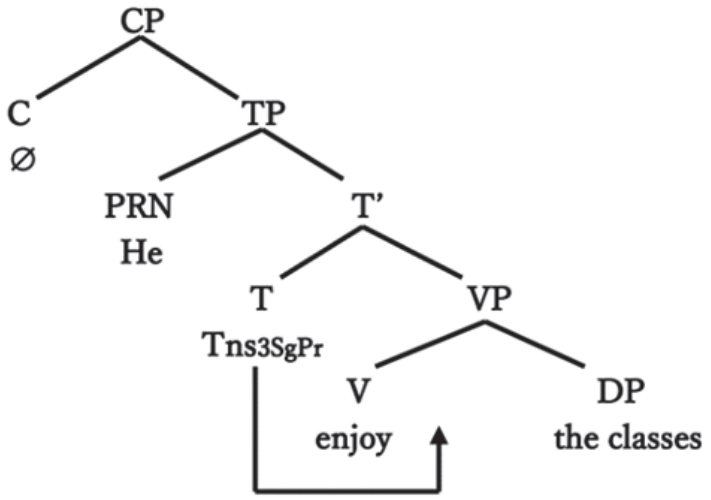
8)



Radford (2004:131)

一方、現代英語においてTはweakなものであると説明され、Tns接辞は一般的に動詞のVからTへの移動を誘発することができない。それゆえTの位置にある接辞を動詞に下降し、それに添加させる接辞移動(Affix Hopping)が起こる。例えば定型節He enjoys the classesの派生は以下のような接辞移動が見られることが分かる。

9)



Radford（2004:132）

strong な Tns 接辞も weak な Tns 接辞も結果的に T の位置で直接的に併合する可能性があるものの、このように strong な Tns 接辞は V から T への移動を引き起こし、現代英語で見られるような weak な接辞は、V から T への移動を誘発せず、接辞移動（Affix Hopping）によって本動詞に付加されていることが分かる。

2.2 Verb movement（T-to-C）

ここまで V から T への主要部移動（V-to-T movement）に着目してきたが、次に T から補文標識 C の位置への移動を見ていくことにする。この T-to-C movement は言い換えれば、主語と助動詞の倒置であり、英語における Yes-No 疑問文で助動詞が主語と入れ替わる。

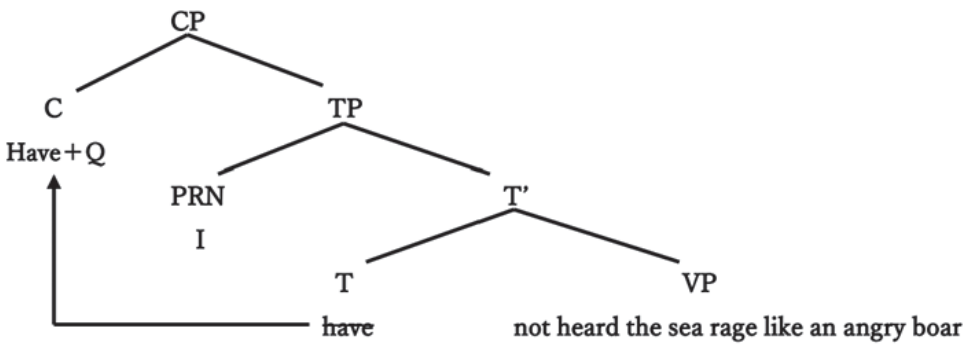
（10） （a）You have eaten breakfast.
（b）Have you eaten breakfast?

Carnie（2013）はこの倒置現象を、特別な空の疑問の補文標識［+Q］の存在によるものだと説明している。この補文標識 Q は空であるために音として現れず、音声的な貢献をしていない。この分析をもとに、エリザベス朝期の例を見ていくことにする。現代英語において疑問文を生成する際に、定型助動詞が T から C へと移動すると仮定すると、以下のエリザベス朝期の例文は次のような派生を伴っていることが分かる。

（11） Have I not heard the sea rage like an angry boar?

（Gratiano, The Merchant of Venice,4.i）

12)



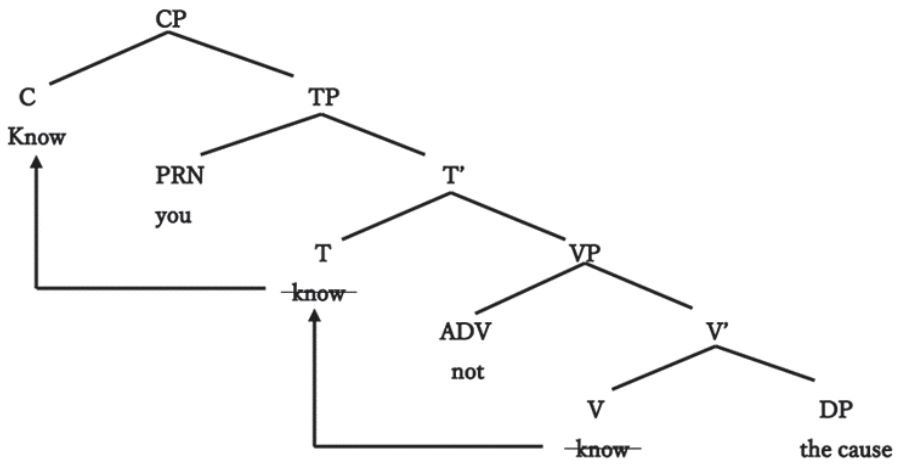
Radford（2004:130）

（13）（a）*Saw* you my master?（Speed, The Two Gentlemen of Verona, I.i）
（b）*Speakfast* thou in sober meanings?（Orlando, As You Like It, V.ii）
（c）*Know* you not the cause?（Tranio, The Taming of the Shrew, IV.ii）

Radford（2004:133）

上記で斜体になっている動詞は移動の結果であり、太字で示した主語の直前の位置に置かれている。これらの文の派生について言及するために、否定疑問文（13c）Know you not the cause? の構造を示すと以下のようになる。

14)



Radford（2004:133）

エリザベス朝期の英語では、時制のある T は強い V 素性を持つ Tns 接辞を含んでいるため、V に基底生成した know が一旦 V へと移動する。また同様に C も強い T 素性を持つ接尾辞 Q を含んでいるため V から T へと移動した know が、さらに T から C へと移動をする。このように動詞 know は V から T、T から C へと連続循環的に移動をするが、これは Head movement constraint（主要部移動制約）のためである。

Head movement constraint/HMC【主要部移動制約】

Movement from one head position to another is a local operation which is only possible between a given head and the next highest head in the structure

Radford（2004:134）

（15） [CP [C Know] [TP you [T ∅] [VP not [V ~~know~~] the cause]]]

Radford（2004:133）

動詞 know の移動元の主要部 V を構成素統御する最も近い主要部は T であるため、上記のように V から C へ動詞が直接的に移動することができず段階的な移動をする。現代英語では Tns 接辞が weak なものであるため、本動詞がそもそも V から T へと移動することができない。それゆえ本動詞 know が C へと移動することはなく、（13c）Know you not the cause? が現代英語において非文となることが、この HMC から説明することができる。

2.3 Have/Be raising

現代英語において本動詞の移動が起こらないことは前述の通りであるが、be や have といった相助動詞の場合には状況が複雑化していく。ここからは法助動詞が含まれる例文も多く参照していくが、後述する相助動詞との区別を図るために、ここで法助動詞のふるまいについて確認しておきたい。will や may、should といった法助動詞は以下のように、あらかじめ T の位置に基底生成すると考えられる。

（16）He should [VP not have taken these pictures].

上記で法助動詞 should は T の位置に現れ、完了の have は否定辞 not のすぐ右に置かれている。否定辞 not は VP の左端に位置することを踏まえると法助動詞は VP の外、T の位置に基底生成していると考えるのが妥当である。それゆえ後に示す相助動詞とはふるまいが大きく異なってくる。

（17） （a）She may not be suitable.
（b）She is not suitable.

Radford（2004:134）

上記（17a）ではコピュラ動詞である be が VP の主要部である V の位置を占めているように見え、一方（17b）では be が not に先行しているため、TP の主要部である T の位置を占めているように思われる。それゆえ（17b）では以下のように、コピュラ動詞 be の V から T への移動が起きていると予測される。

(18) [CP [C ∅] [TP she] [T may] [VP not] [V be] suitable]]]
[CP [C ∅] [TP she [T is] [VP not [V is] suitable]]]

Radford (2004:135)

また以下(19a)では法助動詞 may が TP の主要部である T の位置を占め、VP の主要部である V に動詞 enjoying が位置している。また同様に(19b)においても、VP の主要部である V に動詞 enjoying が生起している。それゆえ(19a)における be の位置、(19b)における is の位置に問題が生じるが、Auxiliary Phrase (AUXP) を仮定し、当該の相助動詞が AUXP の主要部である AUX に基底生成すると考えると(20)のような構造を有していると考えられる。

(19) (a) She may not be enjoying syntax.
(b) She is not enjoying syntax. Radford (2004:135)

(20) [CP [C ∅] [TP she] [T may] not [AUXP [AUX be] [VP [V enjoying] syntax]]]]
[CP [C ∅] [TP she] [T is] not [AUXP [AUX is] [VP [V enjoying] syntax]]]]

(19b)が示すように相助動詞が finite の場合、それが AUX から T へと移動をし、対して non-finite の場合は T の位置が何らかの形で埋まっているため、相助動詞の移動が起こらない。現代英語では基本的に V から T への移動が起こらないものとされるが、このように be 動詞のふるまいに関しては状況が異なってくることが分かる。また finite か non-finite によって助動詞の占める位置が変わるという現象は、be 動詞だけでなく完了の have の例からも散見することができる。

(21) (a) She may not have enjoyed syntax.
(b) She has not enjoyed syntax. Radford (2004:135)

(22) [CP [C ∅] [TP she] [T may] not [AUXP [AUX have] [VP [V enjoyed] syntax]]]]
[CP [C ∅] [TP she] [T has] not [AUXP [AUX has] [VP [V enjoyed] syntax]]]]

Radford (2004:135)

現代英語で T は weak な主要部であり、動詞の繰り上げを誘発しないと前述したが、この一般化は上記の例からも不十分であり見直しが必要とされる。ここでの解決策は当該の be や have は相助動詞であり、本動詞と区別して考えていくということである。それゆえ現代英語では基本的に T への動詞の移動が起こらないものの、have や be といった相助動詞の場合には移動を引き起こすことができると結論付けることができる。

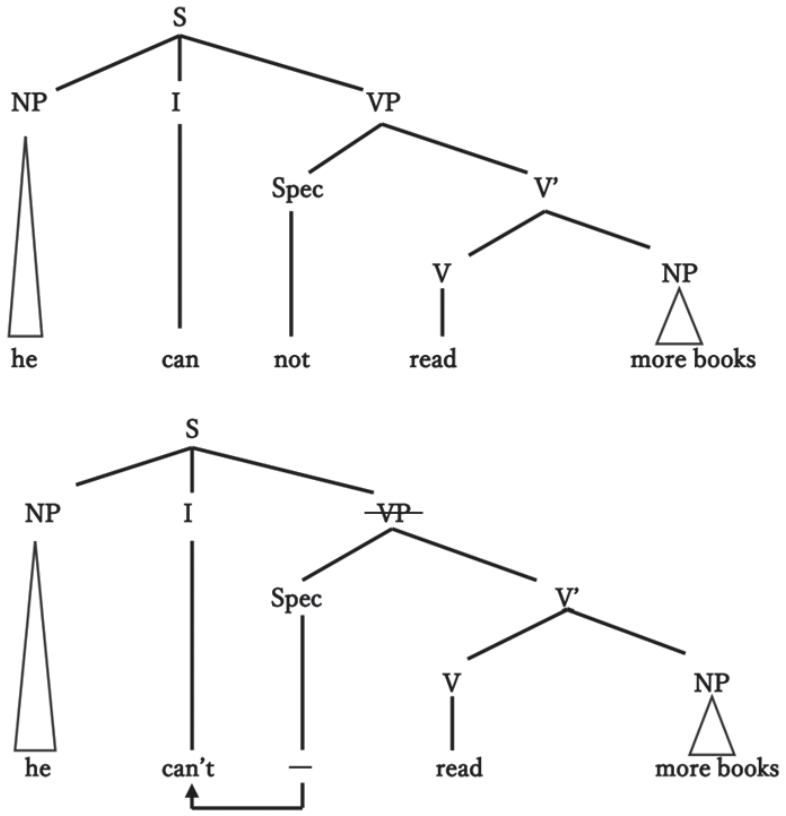
2.4　Not-movement と VP 否定の not

ここまで Head movement（主要部移動）に関する先行研究をまとめてきたが、ここからは否定辞 not の扱い及び、その移動について着目していく。Aarts（2018）は否定辞 not の移動は起こることがないと結論付けているが、まずはこの主張の根拠について探っていくことにする。当該の分析ではまず VP-deletion（動詞句削除）における否定形の法助動詞 can't、won't が引き合いに出されている。動詞句削除は以下（23）のように先行する VP と同じ要素に対応する要素を削除する操作であり、意味・解釈に影響を与えないものである。

（23）Ken will［VP buy a new T-shirt］and Mika won't［VP ~~buy a new T-shirt~~］.

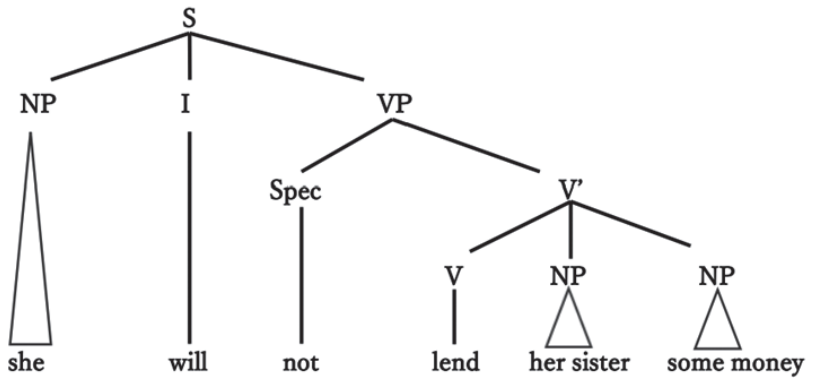
しかし否定形の法助動詞は否定辞が法助動詞に付与されているものであるため、上記の won't も一種のかたまりとして現れている。それゆえ法助動詞それ自身は時制や動詞の活用をつかさどる I-node に生起するものの、-n't は VP 内に生起すると考えられるため問題が生じてしまう。まず一つ目の分析として考えられるのは以下のように、VP 内に生起していた not が I-node に上昇するというものである。以下（24）では VP の指定部に位置していた not が I-node に上昇し、法助動詞 can と併合して縮約形 can't が生成されている。そしてその後、先行する VP と同じ要素である read more books が削除されるという過程である。また（25）は（24）と同様に、VP 内の否定辞 not が I-node に上昇して縮約形 won't が生成され、最終的に VP［lend her sister some money］が削除されているという構造である。

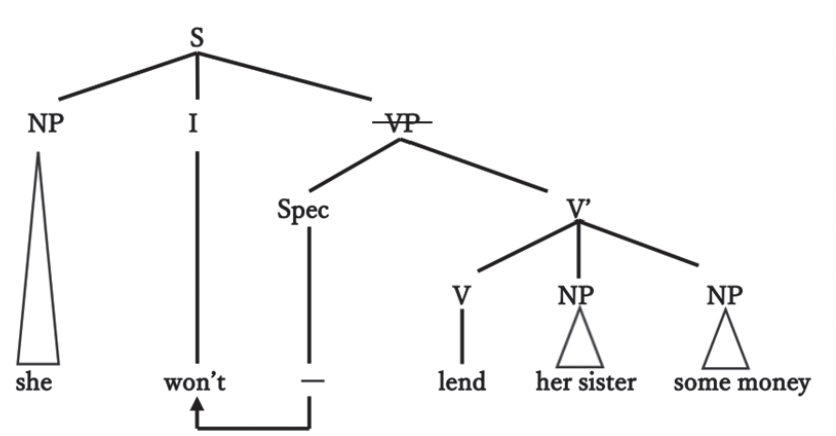
（24）Nick should read more books, but...



Aarts（2018:286）

(25) Millie can lend her sister some money, but...

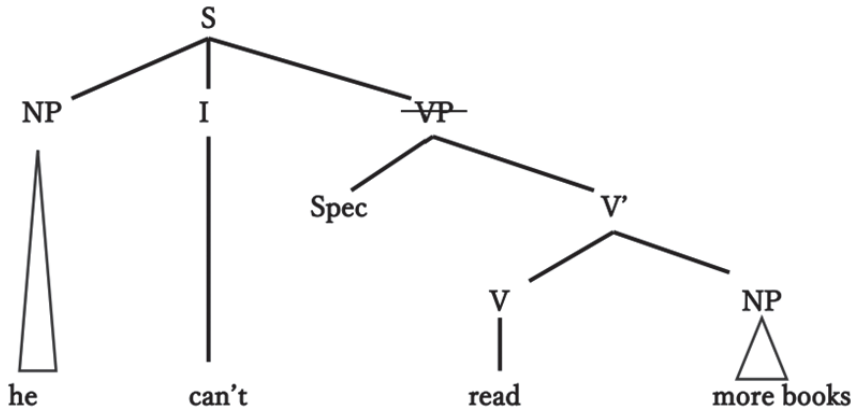




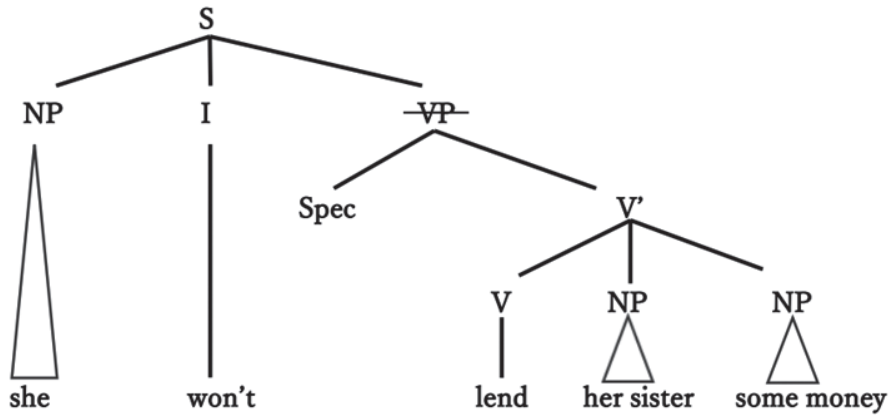
Aarts (2018:287)

また二つ目の分析として考えられるのが上記(24)(25)のようにnotの上昇がなく、縮約形は一語としてI-nodeに基底生成するというものである。それゆえ動詞句削除では以下のようにVP全体が削除されるという過程を経る。またこの立場においてcan't やwon't といった否定形縮約の法助動詞は、それ自身一つの語彙要素として扱われて移動が起こらない。

(26) Nick should read more books, but...



（27）Millie can lend her sister some money, but...



Aarts（2018:287）

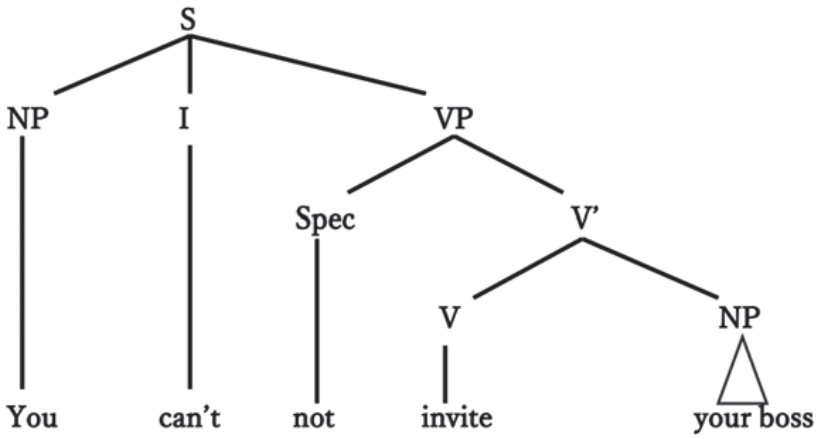
Aarts (2018) は (26) (27) で示すように、新しい規則 Not-movement を仮定する必要はないと主張しているが、その第一の根拠として挙げられるのが、すべての法助動詞が not と併合して縮約形を生成できるわけではないということである。

（28）He may not arrive early.
　　*He mayn't arrive early.　　Aarts（2018:288）

例えば上記 (28) では法助動詞 may が can や will のふるまいとは異なり、not との縮約形が許されないということが示されている。Not-movement を定めることを否定する明確な根拠はないものの、その規則が独立して正当性を持たない限り、その策が説得力の欠けたものになってしまう。また she will > she'll や will > won't のように、ただ単に法助動詞と否定辞 not が組み合わさるのではなく一部の文字が省略されてしまう場合があることからも、縮約形は一般化し難い特異的な修正が関わっているものであると主張している。

また第二の根拠として挙げているのが double negation（二重否定）における構造である。

29）



Aarts（2018:288）

上記(29)ではn't が法助動詞に付加されていることに加え、二つ目の否定要素である否定辞 not が動詞 invite のすぐ左に位置している。それゆえ否定縮約形の法助動詞は I-node に基底生成し、一方で否定辞 not は VP の指定部に位置していると考えることができる。それゆえ double negation(二重否定)を含む文において、一つ目の否定要素に関しては Not-movement をうまく適応することができるものの、二つ目の否定要素に対しては規則としてあてはまることができなくなってしまう。このように Aarts(2018)における分析では、すべての法助動詞が not と縮約することができないこと、そして二重否定における構造を根拠として Not-movement は起こらないという立場をとっている。またここで文否定の否定辞と構成素否定の否定辞の違いについて触れておきたい。

(30) (a) Terry must not have been being followed.
(b) Terry must have not been being followed.
(c) ? Terry must have been not being followed.
(d) *Terry must have been being not followed. Ross (1991:459)

上記(30)は not が文否定の否定辞ではなく VP 内に付与される形をとる構成素否定の not であり、文否定の not とはふるまいが異なっていることを示す例である。この VP 否定の not は(29)のような二重否定文の生成に必要なものである。このように英語では NegP[1] の主要部に基底生成する文否定の not の他に、VP 否定の not が存在していることが分かる。

2.5 Negation Phrase (NegP) 分析

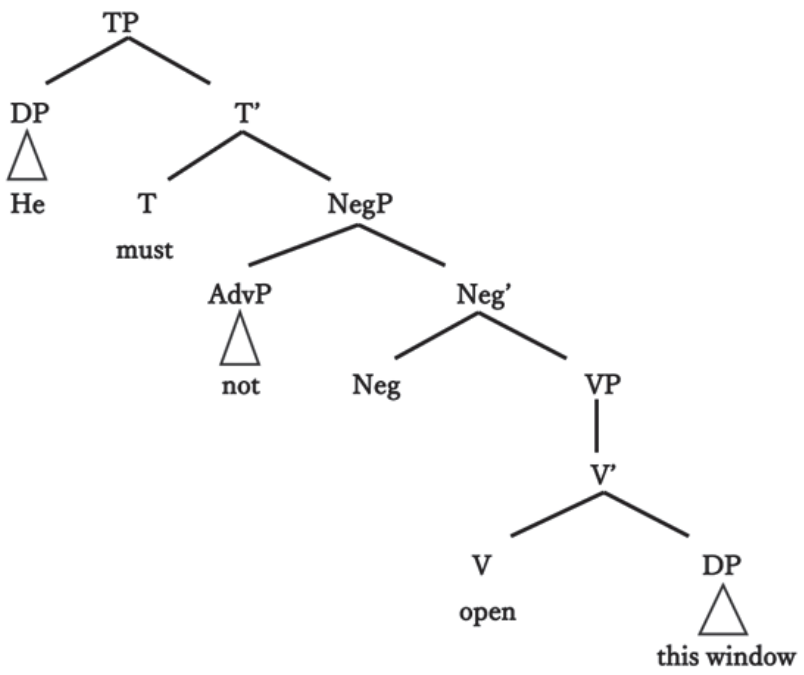
ここまで否定辞 not は VP の左端の位置である指定部に生起すると仮定してきたが、この分析には問題点も多く存在している。問題点の一つとして例えば(19a) She may not be enjoying syntax. では否定辞 not が動詞 enjoying のすぐ左に置かれておらず、よって VP の指定部に位置していない。Radford(2004)では AUX を主要部とする AUXP(Auxiliary Phrase)を仮定しているため、進行の相助動詞 be が否定辞 not と VP の間に介入するという問題が生じる。この問題の解決策として挙げられるのが Pollock(1989)による Negation Phrase(NegP)分析である。

> not is contained within a separate NEGP/Negation Phrase projection, and that it serves as the specifier of NEGP (and hence is positioned in spec-NEGP)
>
> Pollock(1989)

この分析は従来、文法的形式素として扱われていた否定辞 not が機能範疇として Negation Phrase(NegP)という最大投射を持つ句の主要部であるというものである。例えばこの NegP 分析を採用し、He must not open the window. という例を構造で示すと以下のようになる。

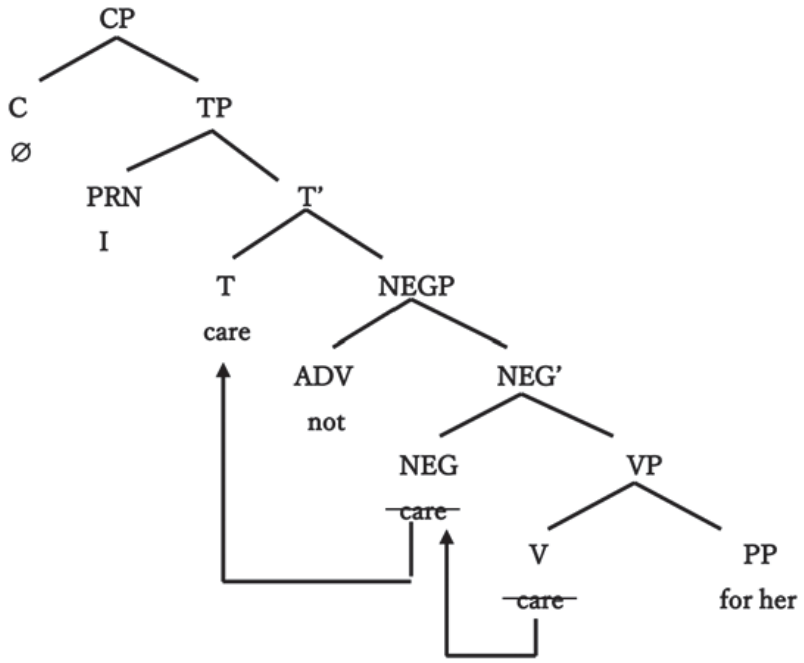
1 Negation Phrase (NegP) 分析は後の 2.5 で概要を述べている。

31）



上記（31）のように否定辞 not は NegP 内に生起し、その指定部として機能している。早期の英語において否定辞 not を含む文は否定辞 ne と共起していたために、ne が主要部 Neg の位置を占め、一方で not は指定部の位置を占めていると主張される。シェイクスピア期になると ne との共起が起こらなくなり、主要部 Neg は null（空）となる。このように考えていくと（5a）I care not for her. の V-to-T movement は以下のように、NegP の主要部 Neg に立ち寄り、2 段階での移動を伴っていると考えられる。

32）



Radford（2004:137）

しかしながら、Pollock の分析には様々な問題点があることが指摘され、分離屈折辞の仮説自体幾多の批判を受けている（岩本 1994）。代表的なものとして Baker（1991）や Ernst（1992）による分析が挙げられるが、本論文の議論では深入りせず第 3 章以降も主に Pollock による NegP 分析を採用して議論を進めていく。

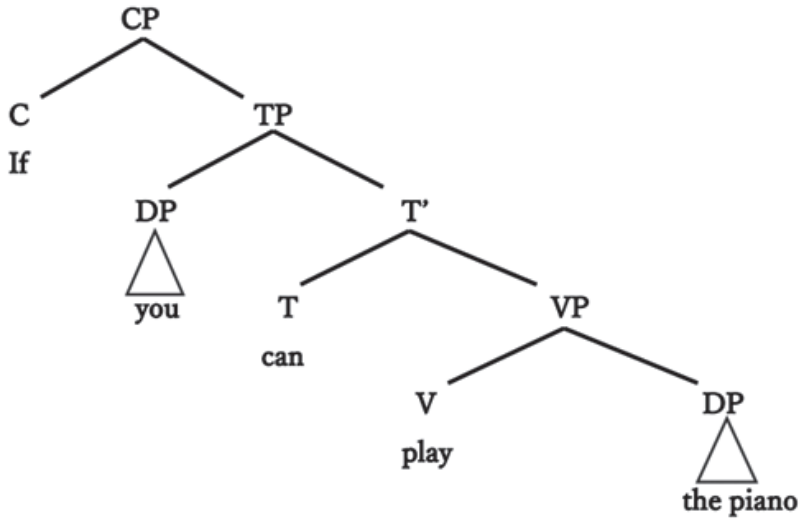
第 3 章　補文標識を省略した仮定法倒置条件節の構造と主文との相違

この章ではまず補文標識と助動詞のふるまいについての確認を行いながら、補文標識 if が省略される場合の条件節の生成過程について触れ、それらの派生の構造を示していく。また否定縮約形の生成過程についても言及し、Not-movement を仮定しないことについての問題点及び NegP 分析の妥当性についても議論をしながら Head movement（主要部移動）における主文と補文との相違を探っていく。

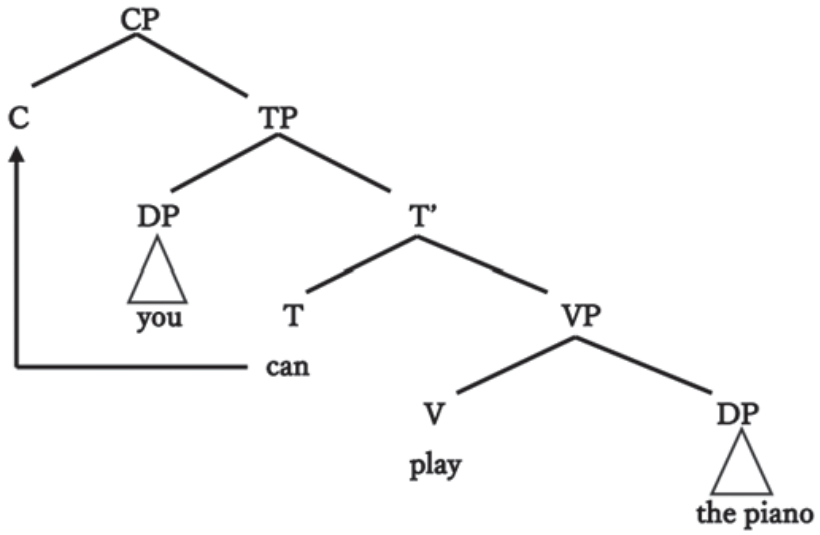
3.1　補文標識 C と助動詞のふるまい

補文標識 C は CP と定義する節内で TP に先行し、CP の主要部である C の位置は that, for, if のような補文標識で満たされる。しかし補文標識は単に節内の主語に先行する語というわけではない。例えば Do you play the piano? が示すように助動詞 do が疑問文として文頭に出た場合、当該の助動詞が補文標識に非常に似たふるまいをしていることがあるからである。ここで補文標識 if が使われている条件節 If you can play the piano 〜、及び疑問節 Can you play the piano? の 2 文を引き合いに出して構造を確認していく。

33）



34)

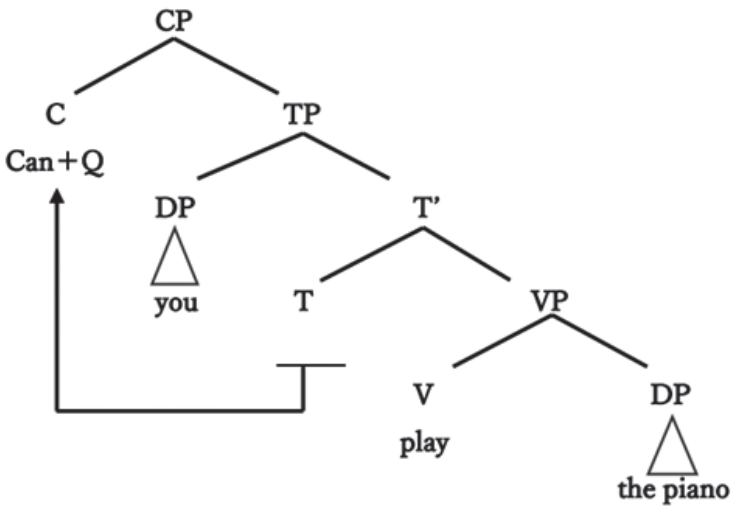


(33) で補文標識 if は CP の主要部である C の位置に生起していて、同じく (34) においても疑問文を生成するために TP の主要部 T に基底生成した法助動詞 can が主語の前に移動している。C のような主要部が占める位置には 1 語だけしか置くことができないと仮定すると、if と can は互いに排他的 (相補分布) の関係にある。それゆえ *If can you play the piano ～のように補文標識と前置された助動詞の両方を含む構造は許されない。また (34) は疑問文を生成する際のいわゆる倒置現象は T から C への移動が関わるものであるということが見てとれる。Chomsky (1995) は比喩を用いて、英語の疑問文における C は strong な主要部であり、その位置は適切な種の overt な構成素によって満たされていなければならないと説明している。しかしながら if のような補文標識は (33) 及び以下の (35) が示すように、補文や埋め込み文で用いることができるが、主文に用いることができない。

(35) I don't know if you can play the piano.

それゆえ主文における疑問文を別個で考える必要が生じる。Baker (1970) は主文では空の Q が疑問文における C の位置を占めていて、その位置を埋めるために空の Q が T から C への移動を誘発していると説明する。ここでなぜ空の補文標識 Q は T から C への移動を誘発するのかという疑問が生じるが、Chomsky (1995) では Q が接辞的なものであり、それを付与するための overt な主要部を引き付けると仮定している。また Chomsky (1993) において、時制を持った助動詞だけが C に移動をし、空の補文標識 Q は strong な tense feature を持ち、それゆえ T から C への移動が生じるとしている。これらの分析をもとに、(34) の構造に Q-affix 分析を加えると以下のようになる。

36）



3.2　補文標識 if を省略した条件節

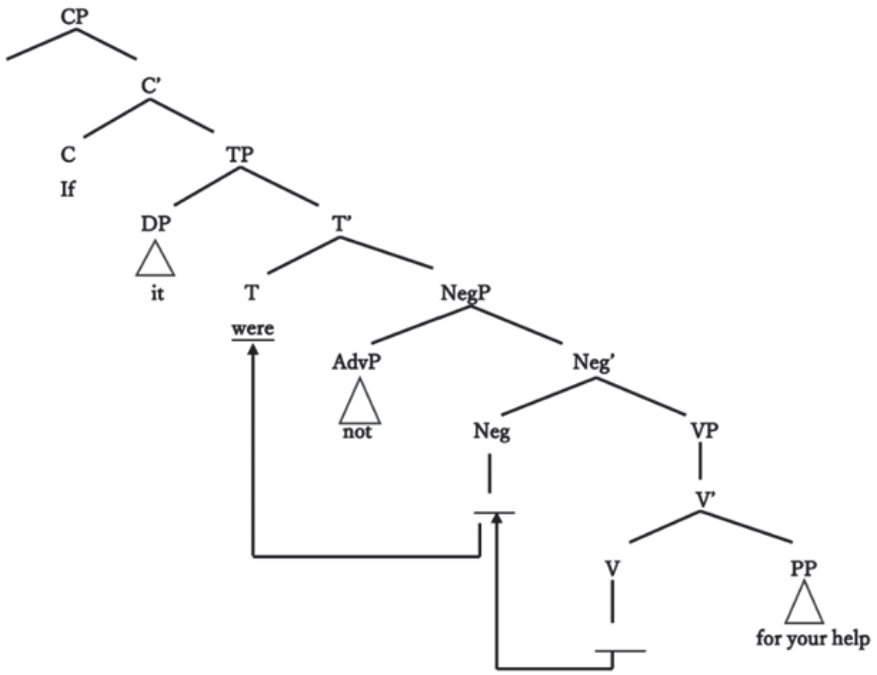
学校文法においても重要視される if を省略した条件節。この仮定法における if 節では、しばしば補文標識 if が省略され、倒置が起こることによって条件節が生成される。ここでは補文標識 if の省略が起こるケースを複数取り上げ、省略前と省略後の構造を比較しながら、その移動について概観していく。

3.2.1　If it were not for ～

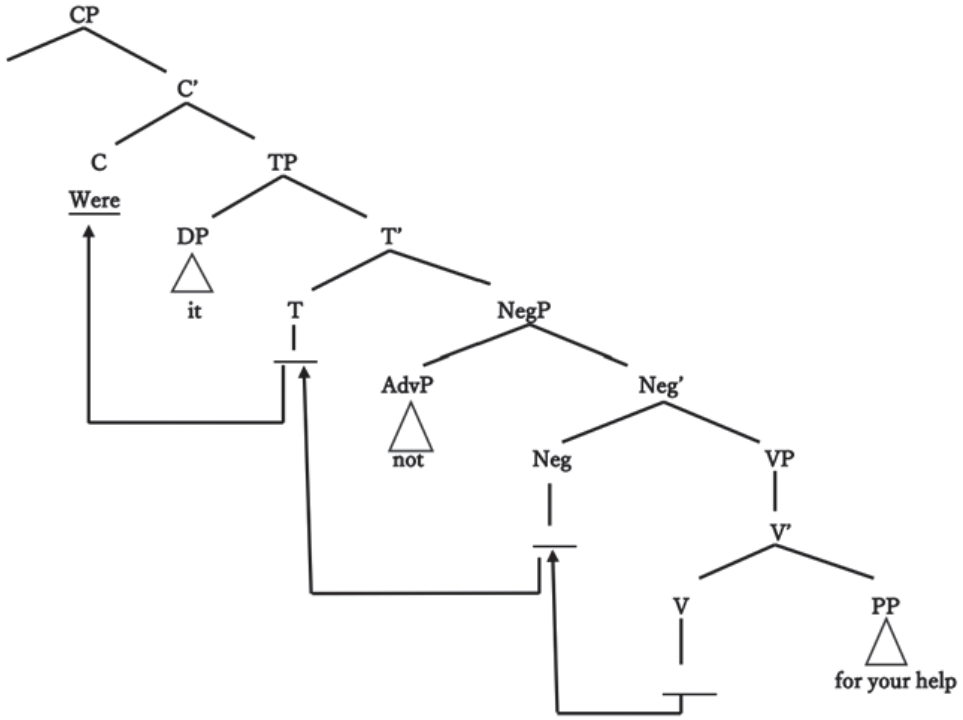
(37)　(a) If it were not for your help, I would have failed the exam.
　　(b) Were it not for your help, I would have failed the exam.

上記 (37a) の補文標識 if を省略し were を主語の前に置くことにより、意味を変えずに (37b) に書き換えることができる。ここで仮定法における if 節も、主文における yes-no 疑問文の補文標識 C と同様に何らかの形で埋められていなければならないと仮定すると、(37) における補文では以下のような移動が起きていると考えられる。

37a)



37b)



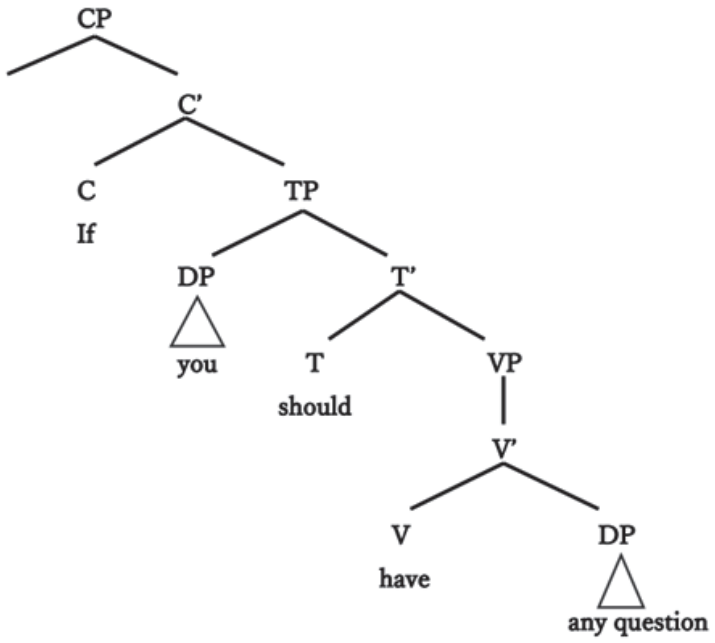
補文標識 C の省略前の (37a) では、V に基底生成した were が NegP の主要部である Neg に移動し、その後に連続循環的に TP の主要部 T に移動している。ここで were が V から T へと直接的に移動ができないのは先述した HMC のためである。また省略後の (37b) では本来 C の位置に生起していた if が省略されることで C の要素が空になり、V から Neg、Neg から C へと移動した were がさらに C の位置まで上昇していることが分かる。それゆえ条件節 Were it not for ～の派生には連続循環的な 3 段階での移動が起きていることが分かる。

3.2.2　should

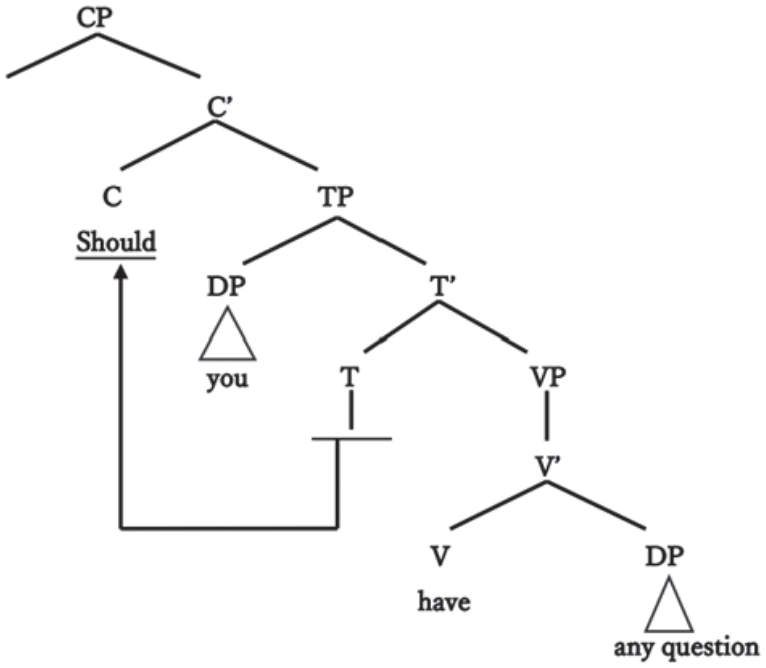
（38）　（a）If you should have any question, please ask me.
　　（b）Should you have any question, please ask me.

“If S should do ～ ” の形で、一般的に未来の事柄に対する仮定を表すことができる。このように助動詞 should が用いられた際の条件節においても補文標識 if を省略することができる。以下、省略前と省略後の構造をそれぞれ樹形図で示す。

38a）



38b）



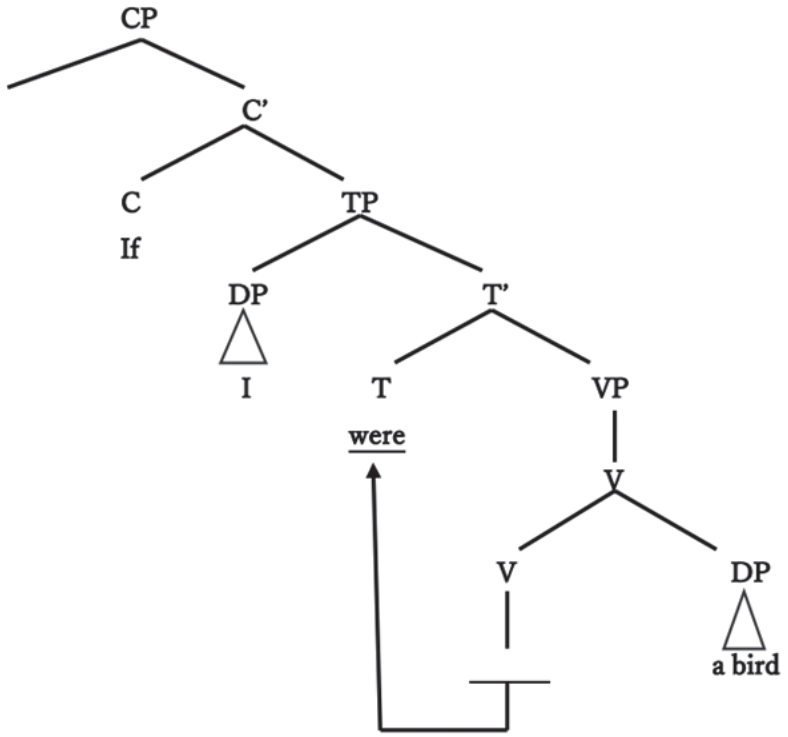
should を用いた条件節の構造において 3.2.1 の ”If it were not for ～ ” のケースが異なってくるのが、T の位置が should によってもともと埋まっているという点である。それゆえ省略前の (38a) では 3.2.1 で述べたような V から T の移動は起こっていない。また省略後の (38b) においても、当該の should が補文標識 C の位置に移動するだけで (37b) で見られるような循環的な移動は起きていない。これが 3.2.1 における if の省略との主要な違いであると思われる。しかし省略によって起きた補文標識 C の欠落により、T から C への主要部移動が起こっているのは両者に共通している主要な点である。

3.2.3　be 動詞を伴った仮定法過去

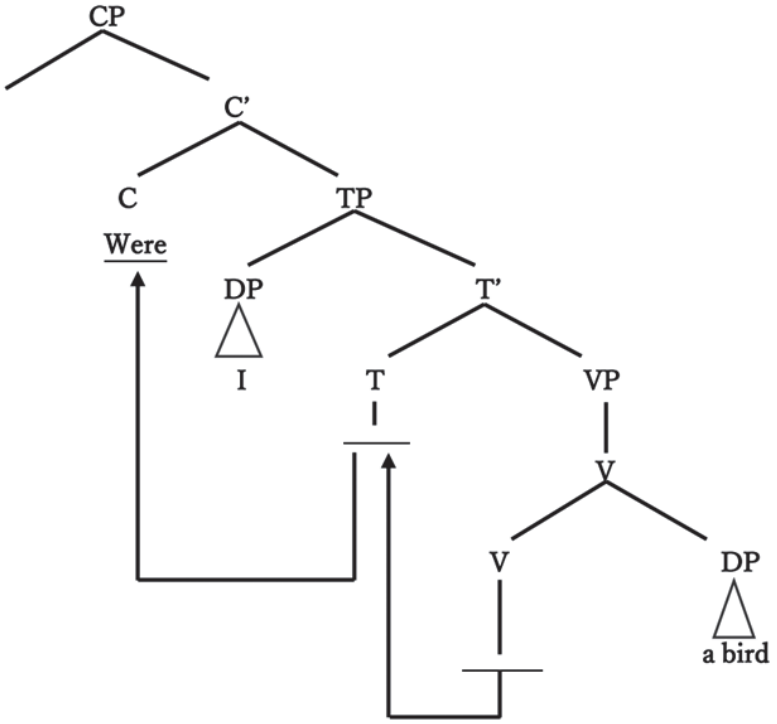
(39)　(a) If I were a bird, I could fly to you.
　　(b) Were I a bird, I could fly to you.

仮定法過去では be 動詞 were の場合のみ、補文標識 if の省略及び倒置が行われる。以下 3.2.1、3.2.2 同様に省略前と省略後の構造を以下のように示す。

39a)



39b）



3.2.1 の ”If it were not for ～ “ の構造と同様、補文標識 if の省略前の (39a) では were が V から T へと移動していて、省略後の (39b) では V から T、T から C への循環的な移動が生じていると考えられる。

3.3　縮約形生成の制約と Not-movement の仮定

3.3.1　縮約形の制約

ここまで補文標識 if を省略した条件節を概観してきたが、ここからは補文標識の省略における縮約形の扱いについて考えていくために、(37) における条件節を縮約形を使って示していくことにする。

(40)　(a) If it were not for your help, I would have failed the exam.
　　(b) If it weren't for your help, I would have failed the exam.
　　(c) Were it not for your help, I would have failed the exam.
　　(d) *Weren't it for your help, I would have failed the exam.

上記のように (40a) における were not を縮約形 weren't を用いて書き換えた補文標識 if の省略前である (40b) は文法的であるのに対し、省略後の (40d) において縮約形を用いると非文になってしまう。これは補文標識 if が省略された後、C の位置を埋めるために移動をした were が本来であれば隣り合っていた NegP の主要部である not と分離してしまうことで生じると考えることができる。それゆえ補文標識 C の省略が起きた場合には、その省略に伴う主要部の移動により縮約形の制約が制限されると予想ができる。

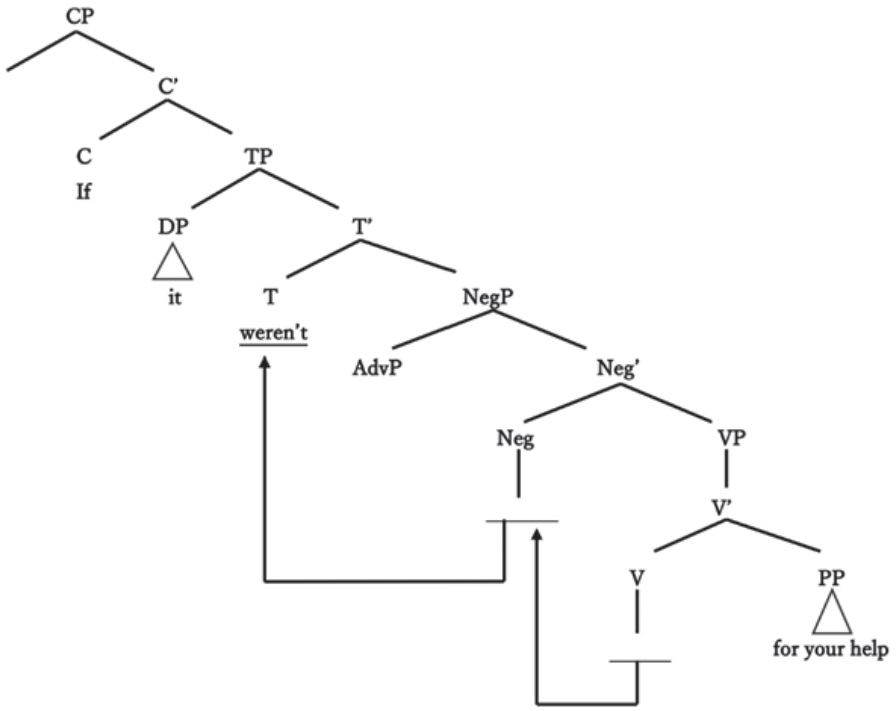
(41)　(a) If I had not met him, I would not be here now.
　　(b) If I hadn't met him, I would not be here now.
　　(c) Had I not met him, I would not be here now.
　　(d) *Hadn't I met him, I would not be here now.

また上記(41)も(40)と同様に縮約形の生成が制限されることを示していて、過去の助動詞hadが用いられている。had notの縮約形であるhadn'tは(41b)が示すように補文標識ifの省略前では生成が許されるが、ifを省略し倒置をした(41d)では(40d)と同様に生成が許されなくなってしまう。ここでも同じくhadが本来隣り合っていたNegPの主要部であるnotと分離してしまうためであると考えられる。

3.3.2　仮定法条件節から考えるNot-movementの可否

2.4でAarts(2018)は法助動詞の否定縮約形を根拠とし、Not-movementを仮定する必要はなく、当該の縮約形は1語としてT(I-node)に基底生成すると主張していることを確認してきた。しかしnotの移動がないと仮定すると、(40)(41)のような補文標識ifを省略した際の仮定法倒置条件節の派生がうまく説明できないように思える。例えば(40b)の条件節における否定縮約形のweren't に注目すると、Not-movementを仮定しなかった場合、weren'tは1語として基底生成していると考えられる。それゆえ否定形weren't は以下のようにNegPの主要部に立ち寄る前にVの位置で基底生成し、その後Tの位置に移動したと考えざる負えなくなる。

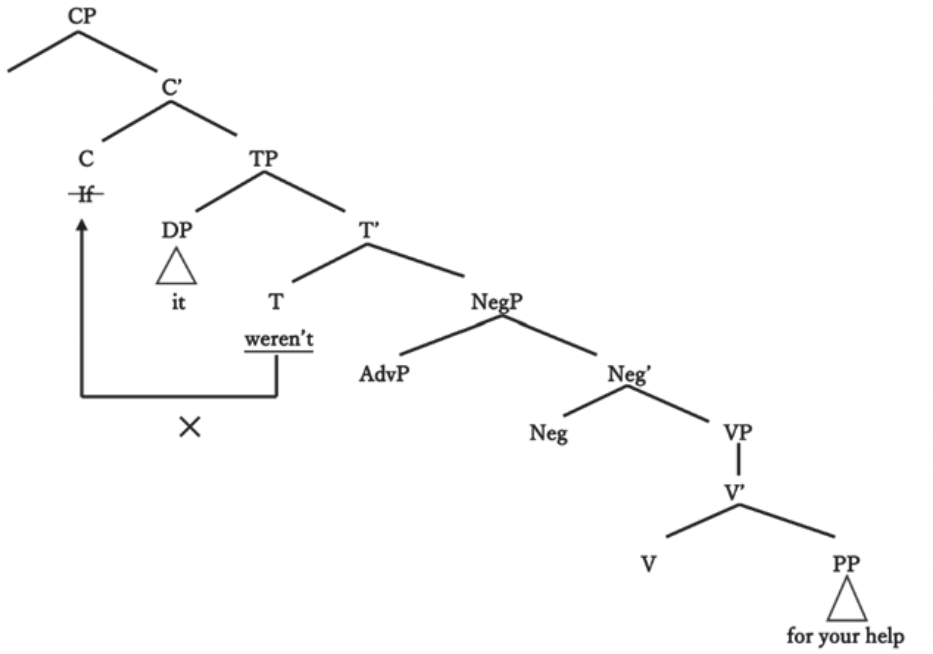
42)



さらに補文標識ifの省略が起こった後、Cの位置を埋めるためにTの要素が移動することが予測されるが、(40d) * Weren't it for your help, I would have failed the exam. が非文と

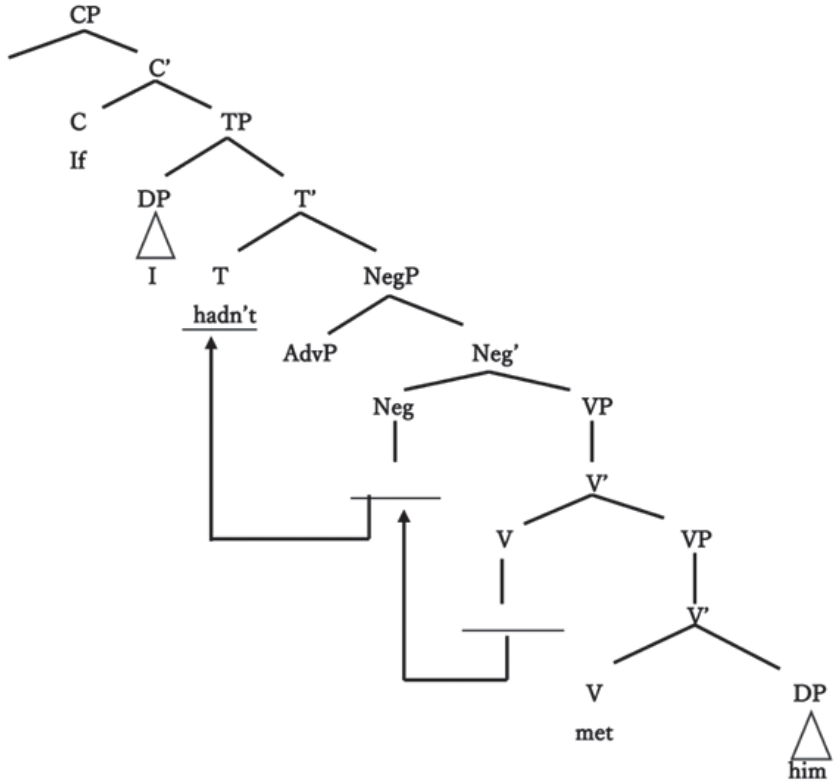
なっているように、(42) で T に位置する否定縮約形の weren't を C の位置に上昇させることが許されない。

43)



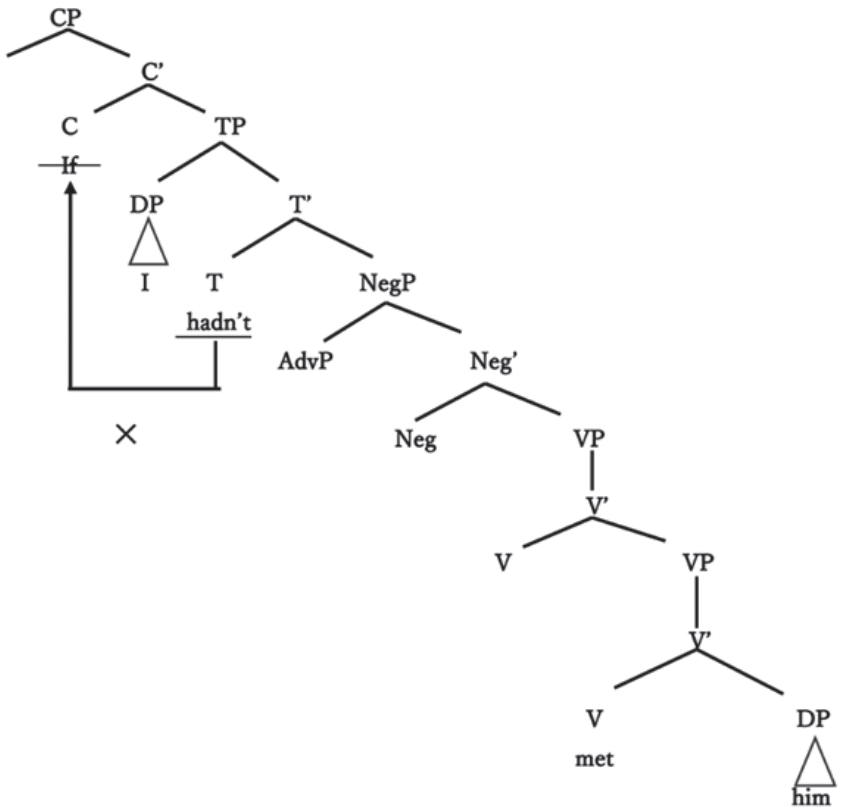
同じく (41b) の条件節に注目しても Not-movement を仮定しない場合、hadn't はそれ自身 1 語として基底生成している。それゆえ (40b) 同様、否定形 hadn't は NegP の主要部に立ち寄る前に V の位置で基底生成し、その後 T の位置に移動したと考えなければならないように思える。

44)



また同様に補文標識 if の省略が起こった際も（41d）*Hadn't I met him, I would not be here now. が非文となっていることから、（44）で T に位置する否定縮約形の hadn't を C の位置に上昇させることが許されないことが分かる。

45）



（40）において条件節 If it weren't for your help ～が許容されるのに対して、補文標識 if を省略した際の Weren't it for your help ～の生成が許されず、（41）においても条件節 If I hadn't met him ～が許容されるのに対して、if を省略した際の Hadn't I met him ～の生成が許されない。もし否定縮約形が 1 語として基底生成すると考えるならば、否定縮約形の weren't、hadn't が T から C の位置へ移動をした結果である条件節（40d）* Weren't it for your help ～，（41d）*Hadn't I met him ～は許容できるはずである。しかし補文標識 if の省略が起こった場合、（40c）Were it not for your help ～，（41c）Had I not met her ～の形となり、結果的に助動詞と否定辞 not が分離した形をとっている。それゆえ否定縮約形がもともと 1 語として基底生成すると考えてしまうと（40b）（40c）が互いに文法的であること、そして（41b）（41c）が互いに文法的であることに疑問が生じてしまう。Aarts（2018）では法助動詞を例に挙げて Not-movement は起こらないという立場をとっているが、このように補文標識 if を省略した際の条件節の例を踏まえると一概にその規則を当てはめることができないように思われる。

3.4　主文・補文両者における縮約形の容認性

3.3 では補文標識 if を省略した条件節に注目し、補文において Not-movement を仮定しない場合に縮約形の生成を上手く説明できないのではないかと主張してきた。ここからはそのような縮約形のふるまいについて着目するために主文と補文の比較を行っていく。

（40d）*Weren't it for your help, I would have failed the exam.
（41d）*Hadn't I met him, I would not be here now.

上記のように補文標識 if の省略の後、T に位置していた否定縮約形の weren't、hadn't が C の位置に移動することができないことを (43) (45) の樹形図で示してきた。しかし主文では以下に示すように、このような制約が働いていないように思える。

（46）Aren't you happy?
（47）Isn't he busy?
（48）Wasn't she sick last month?
（49）Can't you come here soon?
（50）Won't you tell me what happened?
（51）Shouldn't we be concentrating on increasing the number of employees?

接辞化した n't の主文と補文の両者における違いは否定疑問文で現れる。(46) - (51) は平叙文において最終的に T に位置する否定縮約形が、疑問文を生成するために T から C へと移動をした結果であると言える。しかし先述した (40d) (41d) から分かるように、仮定法条件倒置節において T から C への移動が許されないことを踏まえると、主文と補文における縮約形の生成過程と移動は何かしらの違いがあるように思われる。

また上記 (46) – (51) は be 動詞及び法助動詞の例であるが、一般動詞の否定文では do- 挿入が義務的になされるため、状況が複雑化してくる。

（52）Don't you have dinner?
（53）Doesn't she play tennis?
（54）Didn't she know it?

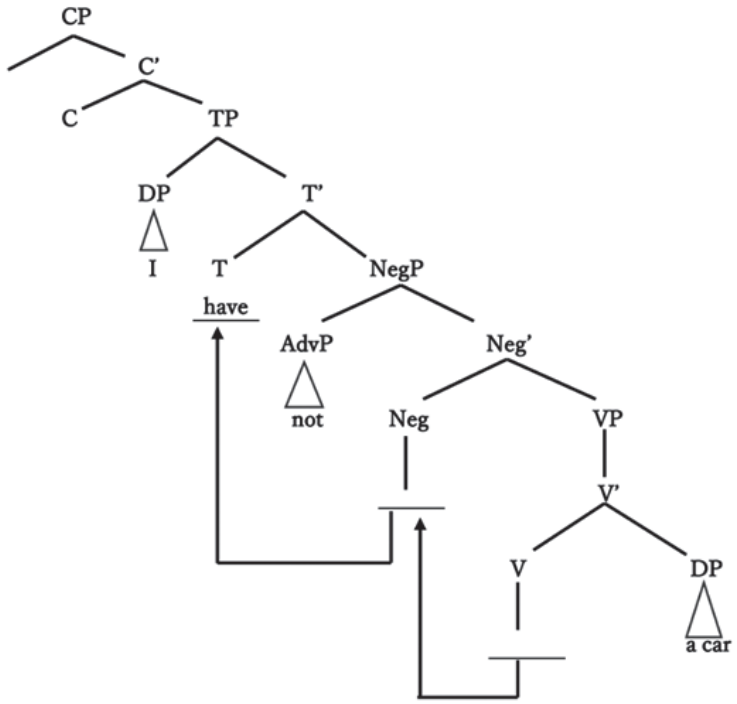
しかし一般動詞においても do- 挿入がなされず、否定辞 not を置くことにより否定文を生成することのできる用例も存在している。現在では使用頻度が減少していると言われているものの、イギリス英語における本動詞 have の用法がそれにあたる。

（55）I have not a car.

上記の have は相助動詞ではなく、「～を持っている」の意味で用いられる本動詞である。し

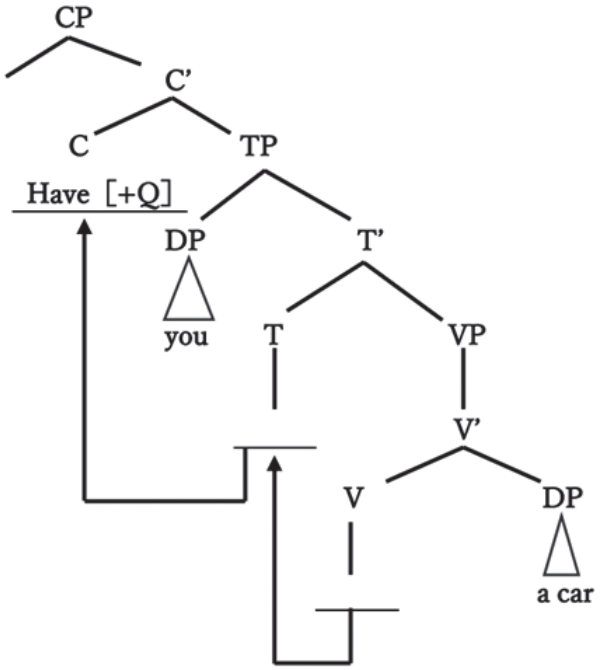
かし否定文を生成する際に do- 挿入がなされず、否定辞 not を本動詞 have の後ろに置くことで文否定がなされている。現代英語では V から T への移動が基本的に起こらないものと考えられるが、このイギリス英語の本動詞 have は助動詞にふるまいが似ていて、相助動詞と同じように V から T への主要部移動が起きていると考えられる。

55）



また疑問文では本動詞 have が主語の左側に置かれていて、V から T へと移動をした have が最終的に C に主要部移動している。

（56）Have you a car?



さらにイギリス英語の本動詞 have は否定疑問文において否定縮約形の haven't が T から C へと移動をしている用例も散見される。下記は著者 Astrid Lindgren による物語文 Pippi Longstocking からの抜粋である。この会話文における have は「両親がいる（両親を持っている）」の本動詞としての用法であることが分かる。

They'd never seen a Cannibal King in all their lives.
But no father was to be seen, nor any mother, and Annika asked anxiously,
'Do you live here all alone?'
'Of course not,' said Pippi, ' Mr Nelson lives here too.'
'Yes, but haven't you a mother and father here?'
'No, none at all,' said Pippi cheerfully.

（LoveReading 4 KIDS）

3.1 において主文で疑問文を生成する際の倒置現象は T-to-C movement に関わる操作であること、そして補文標識と疑問文をつくるために前置された助動詞が相補分布の関係にあることを確認してきた。しかしもしそれを前提に考えるのであれば、補文標識 if を省略した条件節においても否定縮約形の T から C への移動が、主文における否定疑問文が示すように許容されてもよいはずである。しかし（40d）及び（41d）がいずれも非文となってしまっている。それゆえ主文と補文の両者における否定縮約形の生成と移動に関して別個で考えていく必要があり、そのような縮約形のふるまいの違いを決定づけている要因があるのではないかと分析した。4 章では本章で挙げた問題点を踏まえながら、Aarts（2018）の Not-movement に関する分析に見直しが必要であること、そしてこのような主文と補文における縮約形の違いが、空の補文標識 Q によるものではないかということを提案していく。

第 4 章　結論と提案

4.1　Aarts（2018）Not-movement 分析の見直し

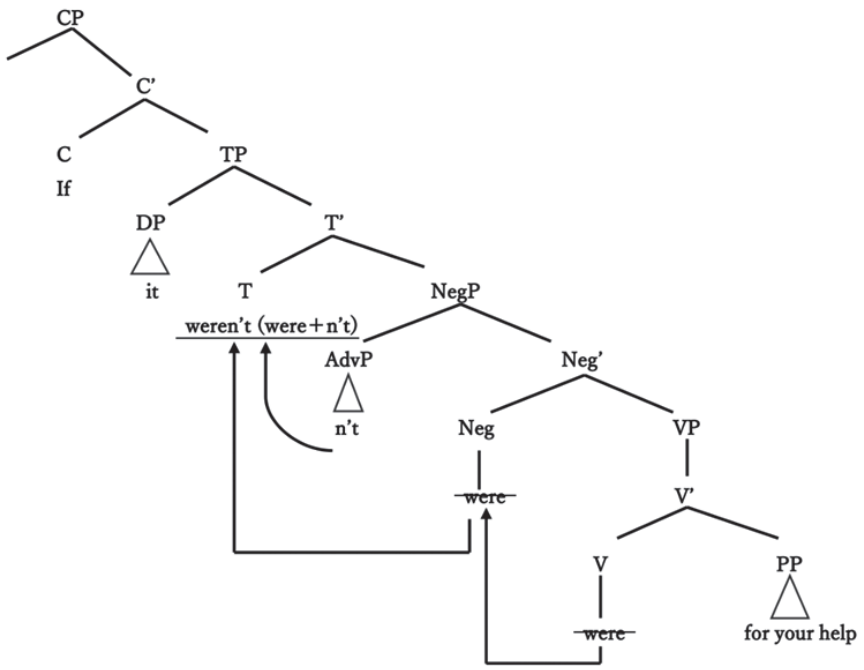
まず第 3 章で補文標識 if を省略した条件節において Not-movement を仮定しないと、省略に伴う移動の過程がうまく説明できないと言うことを主張してきた。ここで Not-movement を仮定した際の（40）（41）の構造がどのようなものになるのかを樹形図を示して概観していく。

（40）　（a）If it were not for your help, I would have failed the exam.
　　（b）If it weren't for your help, I would have failed the exam.
　　（c）Were it not for your help, I would have failed the exam.
　　（d）*Weren't it for your help, I would have failed the exam.

（41）　（a）If I had not met him, I would not be here now.
　　（b）If I hadn't met him, I would not be here now.

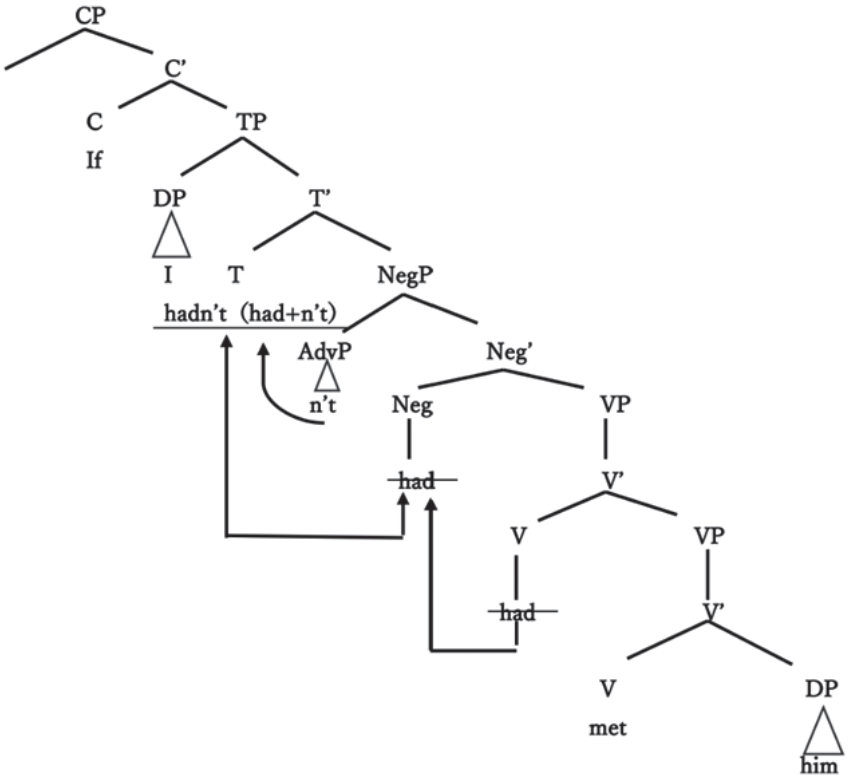
(c) Had I not met him, I would not be here now.
(d) *Hadn't I met him, I would not be here now.

57)



上記(57)はNot-movementを仮定し、条件節(40b)の縮約形の生成を示した結果である。VPの主要部として基底生成したwereが主要部移動によりNegPの主要部Negを経由してTに上昇した後、NegPの指定部に位置していた-n'tがTの位置に繰り上げられて接辞化したものだと考えることができる。また同様に条件節(41b)の構造を以下で示す。

58)



このようにNot-movementを仮定することにより、(40a)-(40c)及び(41a)-(41c)における条件節の派生を問題なく説明することができる。それゆえ主文における縮約形のふるまいのみを根拠とし、Not-movementを否定するAarts(2018)の見解と分析は不十分であるとここで主張したい。

また(37)の樹形図が示すように、notがNegPの指定部の位置に残っているとすると、notは助動詞と一緒に文頭のCに移動しないことが予測される。これは主文における否定疑問文においても同様であることが分かる。

(59) (a) Will John not have bought the yogurt?
(b) *Will not John have bought the yogurt?
(60) (a) Have you not met Ann yet?
(b) *Have not you met Ann yet?
(61) (a) Did John not buy the yogurt?
(b) *Did not John buy the yogurt? 岩本 (2014:44)

これに対し、主文において接辞である-n't は助動詞やdoとともにCへと移動する。

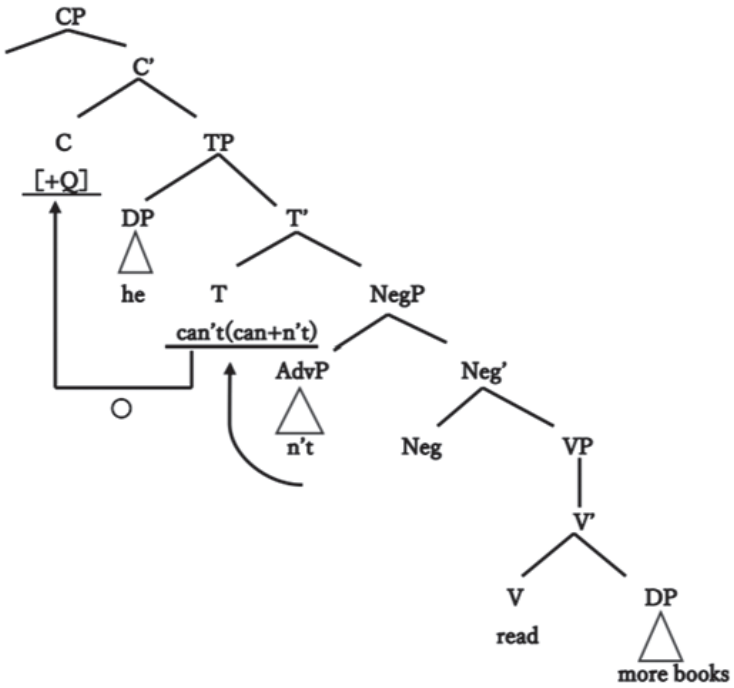
(62) (a) Won't you come to our party?
(b) *Will you -n't come to our party?
(63) (a) Didn't you buy the yogurt?
(b) *Did you -n't buy the yogurt? 岩本 (2014:44)

しかし本稿で問題として扱った補文標識ifを省略した条件節では(63)(64)と同様の過程で接辞である-n't が助動詞とともにCへと移動することが許されていなく、この点が縮約形のふるまいに関する主文と補文の間の主要な違いであると考えられる。単純に考えていくのならば、縮約形のT-to-C movementを妨げている補文に何かしらの制約が働いていると考えるのが妥当のように思えるが4.2では主文における空の補文標識Qに注目し、接辞Qの働きによって縮約形のT-to-C movementを可能にしているという最終的な提案をまとめていく。

4.2 Null complementizer Qと否定縮約形

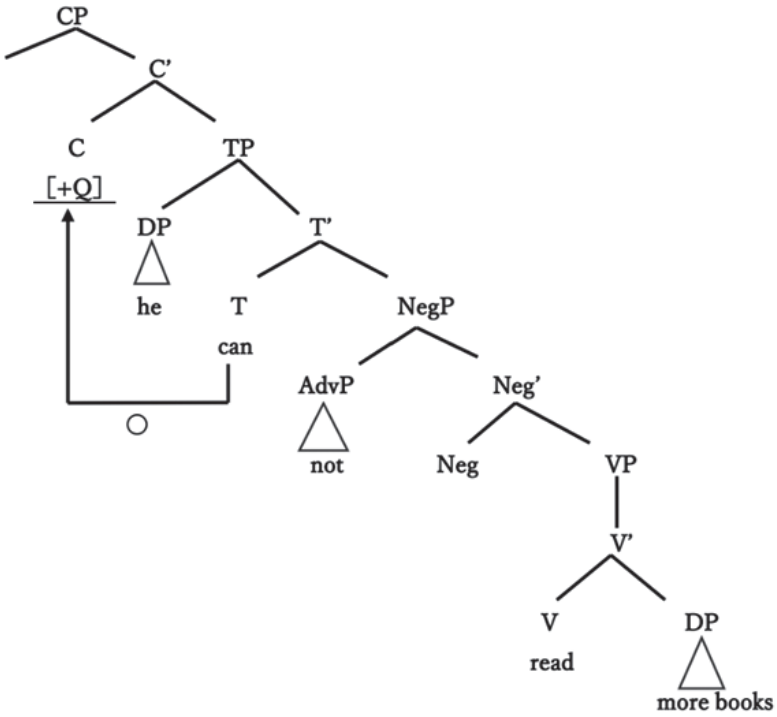
補文標識ifの省略が起こった際の倒置条件節においてTに位置していた助動詞が最終的にCに移動すること、そして否定疑問文において前置された助動詞がCに位置することを踏まえると、両者は非常に似た構造を有しているため、否定縮約形の生成過程とふるまいの相違を構造上の観点から説明することが困難であるように思える。Radford(2004)では(14)の構造で触れたように、現代英語における疑問のfinite Cがstrongなものであり、強いT素性を持つQuestion Particle Qを含むと仮定し、接辞QがT-to-C movementの引き金となっていると考えてきた。上記を踏まえ、このセクションでは主文と補文における縮約形のふるまいの違いが接辞Qの有無によるものではないかという主張をまとめていく。

(64) Can't he read more books?



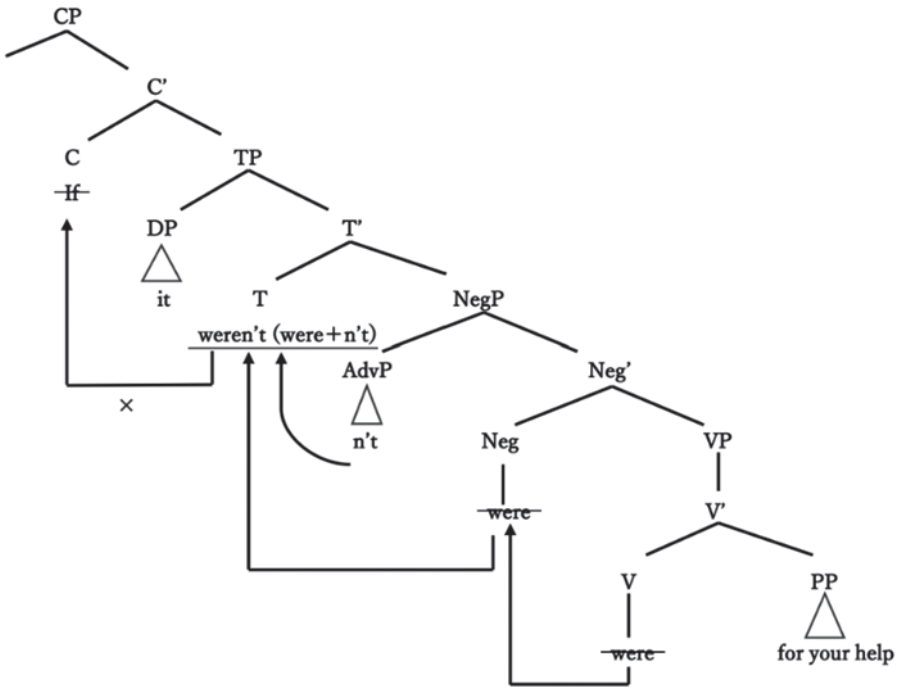
上記(64)における否定疑問文では縮約形の can't を生成するために NegP の指定部に位置していた -n't が T に上昇して can と接辞化し、その後接辞 Q が引き金となり、T に位置する縮約形 can't が C へと移動したものと考えられる。また接辞化が起こらない場合には、not は NegP の指定部にとどまり、接辞 Q の働きによって T に基底生成していた can が C へと移動する。

(65) Can he not read more books?

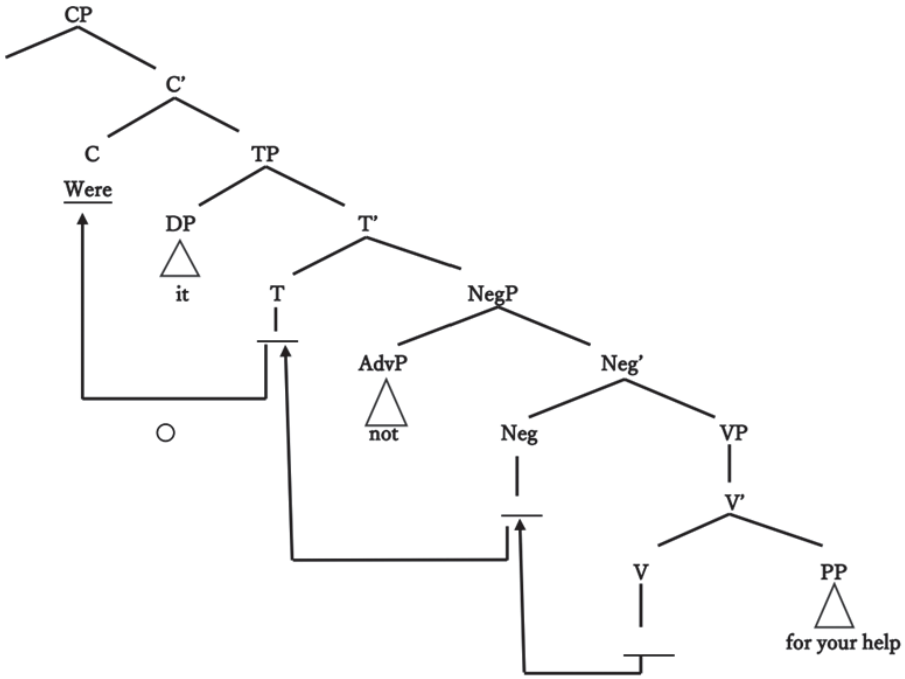


しかし補文標識 if を省略した倒置条件節では (64) のように縮約形の T から C への移動が許されない。ただし接辞化に伴う Not-movement が起こらない場合には not が NegP の指定部にとどまり、V から Neg を経由して T へと移動した were が最終的に C へと移動する。

66)



67)



この主文の否定疑問文と仮定法倒置条件節の対比からは、接辞 Q が存在している場合に限り否定縮約形が T から C へと移動することが許されているのが分かる。Chomsky の比喩を用いれば、主節の疑問文における C は strong なものと扱われ、その strong な C によって

Not-movement で生成した縮約形を T から C に上昇させることができると考えられる。しかし本稿で扱った補文標識 if を省略した倒置条件節においても、T から C への移動が散見され、ゆえに補文における C も主節の疑問文と同様に strong なものであると予測できる。ただし当該の補文では強い T 素性を持つ接辞 Q が存在していないことから、Not-movement によって T で 2 語から 1 語へと接辞化した要素を C に上昇させることができない。それゆえ主文と補文の両者で、一見同等に見える T-to-C movement には程度の差があるのではないかということをここで主張する。否定疑問文では finite C が strong なものであり、接辞 Q がもともとは別の 2 語として生起していた縮約形を C に上昇させることができる。一方補文では C が strong であるものの、そのような接辞 Q を持ち合わせていないために T で接辞化した縮約形を C へと移動させることができない。それゆえ先述したように、主文の疑問文では接辞 Q の働きによって否定縮約形を T から C へと上昇させることのできる特別な移動を引き起こしていると結論付ける。しかしながら Q-affix 分析をもとに、主文の T-to-C movement が接辞 Q の働きによるものだと仮定すると、補文における T-to-C movement の引き金となっている要因は一体何であるかという疑問も生じる。この点については、補文における助動詞の移動先が本当に C であるのかという考え方を含め、さらに議論の余地があるように思われる。

第 5 章　おわりに

本稿では動詞及び相助動詞の主要部移動や否定辞 not の統語的な位置づけを確認し、NegP 分析を採用しながら、主に補文標識 if を省略した際の倒置条件節に着目して主文と補文の相違を探ってきた。結論としてそのような倒置条件節を考えた際、Not-movement を仮定しないと省略に伴う移動と派生が上手く説明できず、問題が生じてしまうということを述べた。また主文と補文の T-to-C movement には構造上掴みにくい縮約形のふるまいという相違があり、それが接辞 Q によるものであるということを最終的な提案としてまとめた。補文における finite C も主節と同様に strong なものであり、接辞 Q の有無によって主文と補文における縮約形の違いを生み出していると考えられる。

本論文を執筆するにあたり、否定辞 not や縮約形に関する研究が予想以上に少ないことを実感し、改めてそれらに対して統語的な観点からアプローチしていくことの意義を感じさせられた。特に縮約形に関しては、その生成過程を統語的に論じている研究は非常に少なく、まだまだ議論の余地があると考えられる。なお今回は Pollock (1989) に基づき NegP 分析を前提として論を進めてきたが、この分析に対しても幾多の批判があるため改めてこの前提から問い直す必要もあるだろう。そしてこのような縮約形のふるまいに関しては、構造的な問題だけでなく語用論的・意味論的にも幅広く分析を重ねていくことが必要になってくると思われる。

〈参考文献〉

Aarts, B.（2018）English Syntax and Argumentation Fifth edition, London, Red Grobe Press

Baker, C.L.（1970）'Notes on the description of English questions: the role of an abstract question morpheme', Foundations of Language 6: 197-219.

Baker, C.L.（1991）The syntax of English not: the limits of core grammar. Linguistic Inquiry 22: 387-429.

Carnie, A.（2013）Syntax A Generative Introduction Third edition, Oxford, Blackwell Publishing

Chomsky, N.（1993）'A minimalist program for linguistic theory', in Hale and Keyser（eds.）, pp.1-52（reprinted as chapter 3 of Chomsky 1995）

Chomsky, N.（1995）The Minimalist Program, MIT Press, Cambridge, Mass.

Ernst, T.（1992）The phrase structure of English negation. The Linguistic Review 9: 109-144.

岩本弘道（2014）「否定文と節の構造：not の統語論的位置づけについて」『神奈川工科大学研究報告』A-18: 39-48

LoveReading 4 KIDS「Pippi Longstocking」
https://www.lovereading4kids.co.uk/extract/11469/Pippi-Longstocking-by-Astrid-Lindgren.html
（Accessed December 12, 2023.）

野村忠央（2019）「仮定法の倒置をめぐって」
https://www.elsj.org/backnumber/proceedings2019/proceedings-nomuratadao.pdf
（最終閲覧日：2023 年 12 月 14 日）

Pollock, J.Y.（1989）Verb movement, UG, and the structure of IP. Linguistic Inquiry 20: 365-424.

Radford, A.（2004）English Syntax: An Introduction, Cambridge, The Press Syndicate of The University of Cambridge

Ross, J.R.（1991）Verbiness and the size of niches in the English auxiliary. C. Georgopoulos, and R. Ishihara（eds.）, Interdisciplinary approaches to language: essays in honor of S.Y. Kuroda. Kluwer Academic Publishers